

RI\*WAC

Research Institute for Women and Careers

日本女子大学現代女性キャリア研究所

RIWAC 管理番号	RJO0037
調査タイトル	「社会活動における日本女子大学の役割と生涯学習の意義 ～日本女子大学卒業生インタビューから～」
論文／雑誌名	「社会活動における日本女子大学の役割と生涯学習の意義 ～日本女子大学卒業生インタビューから～」『日本女子大学 総合研究所紀要』第 10 号
著者	堀越栄子・川嶋庸子・土屋真美子
掲載ページ	pp.105-112.
発行年	2007.11
出版社	日本女子大学総合研究所

## 目 次

まえがき	岩 田 正 美
生涯学習総合センター（目白）と西生田生涯学習センター	天 野 晴 子
生涯学習センター受講者意識調査結果の解説	岩 木 秀 夫
現代女性の職業キャリアと日本女子大学卒業生のライフコース —2006年インタビュー調査から—	小 林 多 寿 子
社会活動における日本女子大学の役割と生涯学習の意義 ～日本女子大学卒業生インタビューから	堀 越 栄 子・川 嶋 庸 子・土 屋 真 美 子
桜楓会と生涯学習	真 橋 美 智 子
図書館友の会と生涯学習	岩 淵 (倉 田) 宏 子
女子大学における生涯学習についての一考察	百 々 佑 利 子
西日本方面女子大学における生涯学習の現状	高 増 雅 子
梨花女子大学における生涯学習 —イ院長・カク副院長へのインタビューから—	小 林 多 寿 子

## 社会活動における日本女子大学の役割と生涯学習の意義 ～日本女子大学卒業生インタビューから

堀越 栄子<sup>1)</sup>・川嶋 庸子<sup>2)</sup>・土屋 真美子<sup>3)</sup>

本章は、社会活動を行っている卒業生20名へのインタビュー調査から、日本女子大学の教育が果たした役割と、卒業後の生涯学習が果たした役割をまとめたものである。

### 1. 本調査の目的

本調査は日本女子大学における生涯学習の意味を明らかにする目的で、卒業生にインタビューを行い、今後の生涯学習のあり方について考察を試みたものである。

これまで、社会活動と言われる市民活動や非営利活動の活動現場で、日本女子大学の卒業生が多く活躍していることは指摘されてきた。ただ、学歴不問の活動現場では、数量的把握ができるものではなく、感覚的に「多い」という印象を多くの人が持っているにすぎない。本調査の中でも、数人の卒業生が「社会活動をしている日本女子大学の卒業生は多い」という回答を寄せているが、「わからない」という人も多い。

しかしながら、多く活躍しているといわれる背景、少なくとも筆者らの周囲には実際に相当数の人が社会活動分野で活躍している背景には、何らかの日本女子大学の果たした役割があったという仮説のもと、市民活動等の現場で活躍している卒業生にインタビュー調査を行った。数量的な把握ではなく、個別の卒業生からじっくり話を聞くことで日本女子大学の役割、あわせて卒業後の生涯学習のあり方を浮かび上がらせたいと考え、本調査を実施した。

検討項目は、①社会活動において、日本女子大学の教育が果たした役割、②社会活動において、卒業後の生涯学習が果たした役割の2つである。

### 2. 本調査のプロセス

本調査は以下のプロセスで実施した。

#### ①インタビュー対象者の発掘

全学科（15学科）に依頼して、活躍している卒業生を2名程度紹介してもらった。ただ、学科を通して紹介されたのは10名に過ぎなかったため、追加の情報収集を行い、10名を追加した。

#### ②インタビュー

20名の対象者に、2006年2月から3月にかけて、活動歴、活動している団体の概況、生涯学習歴についてインタビューを行った。インタビューを担当したのは、卒業生のスタッフである。

#### ③インタビュー結果のまとめ

インタビュー担当者がそれぞれインタビュー結果をまとめた。

#### ④分析

インタビューの結果を、インタビュー担当者11名を含むプロジェクトチームで分析した。

### 3. インタビュー対象者の属性

#### (1) 属性

今回のインタビュー対象者20名の属性は、以下のとおりである。

#### 〈世代〉と社会状況

回生	人数	年齢(当時)※	大学入学の年-卒業の年
10回生	1名	68歳	1955年-1959年
13回生	1名	65歳	1958年-1962年
14回生	1名	64歳	1959年-1963年
17回生	1名	61歳	1962-66年
18回生	2名	60歳	1964-68年
19回生	1名	59歳	1965-69年 団塊世代
20回生	2名	58歳	1966-70年 団塊世代
22回生	1名	56歳	1968-72年
23回生	1名	55歳	1969-73年
24回生	2名	54歳	1970-74年
29回生	2名	49歳	1975-79年
31回生	1名	47歳	1977-81年
32回生	1名	46歳	1978-82年
39回生	1名	39歳	1985-89年
44回生	1名	34歳	1989-93年
48回生	1名	30歳	1993-97年

※年齢はインタビュー当時

#### (2) 40歳代後半以上が17名

今回20名の卒業生がピックアップされたが、40歳代後半以上が17名であり、30歳代は3名であった。20名を時代と関わらせてグループに分けると、

①10-14回生グループ 3名 60年安保世代

②17-24回生グループ 10名 学生運動経験世代

③29-32回生グループ 4名 その後の空白世代

の3グループに分けることが出来る。今回のインタビュー対象者に限ってみると、最も多いのは②の学生運動の洗礼を受けた世代である。

#### (3) 既婚者が18名、そのほとんどが専業主婦経験者である

20名中18名が既婚である。さらに、そのほとんどが専業主婦経験者である。

#### (4) 出身学科

出身学科は、家政経済学科4名、次いで、英文学科3名、史学科、児童学科、住居学科がそれぞれ

れ2名、食物学科などは1名ずつになっている。ただ、これは学科の特徴によるものというよりは、今回のインタビュー調査関係者が多いことによると考えられ、あまり意味はない。現代社会学科、心理学科、文化学科の卒業生がいないのは、学科創設が1995年であり、卒業生が社会運動年齢に達していないためであろう。

#### (5) 日本女子大学との関係～一貫教育の影響

20名のうち6名が附属中学校、附属高等学校の出身であり、彼女たちは日本女子大学の一貫教育を受けている。社会活動を行うことと一貫教育の影響については後述する。

#### (6) まとめ

##### ① 40歳代後半以上がほとんど

今回インタビューに応じてくれた20名の卒業生のうち約8割が40歳代後半以上であり、30歳代は非常に少なかった。これは40代前半以下はまだ子育て時期であり、社会活動に目を向けるゆとりがないという理由もあるだろう。後で述べるように、20名の活動開始年齢は30歳代後半から40歳代後半にかけてであったことから、裏付けられる。活動をはじめて中心的役割を担うまでには、4～5年かかる。30歳代、40歳代前半はまだ学科に知られるような社会的な活躍の芽が出ていないということも考えられる。

##### ② 比較的ゆとりのある家庭が多い

対象者の多くが、専業主婦経験者であった。これは専業主婦でいられる経済的ゆとりがある家庭であることを意味する。卒業生の多くは比較的経済的にも時間的にもゆとりのある家庭を築き、就労の必要がないので再就職の代わりに社会活動を行う、という傾向は見受けられる。ただし、後述するように、ゆとりがあればだれもが社会活動を行うというわけではないこともまた事実であり、社会活動に結びつくには問題に直面した際の考察力や、問題や課題の発見力、行動力が必要である。

## 4. 活動をはじめた年齢とそのきっかけ

### (1) 年齢ときっかけ

活動をはじめた年齢とそのきっかけは、以下のとおりである。

- A：46歳：障害者の長男が養護学校を卒業するにあたって
- B：49歳 アメリカでの生活経験を生かし、帰国後、国際ボランティアをはじめ
- C：40歳：生涯学習をきっかけとして
- D：43歳：ぶなの美しさに魅せられる
- E：39歳：障害児施設のパザーを手伝ったこと
- F：17歳：東京パラリンピックで通訳をした
- G：40歳：子ども劇場がきっかけ
- H：39歳：スリランカで隣人からボランティアをすすめられた
- I：54歳：42歳の時に10歳の次男を病気で亡くしたこと
- J：50歳：石垣島出身なので、もともと地域で沖縄に関わることをしたいと思っていたところ、

勤めていた学習教室が倒産したので、自宅を改装してギャラリーをはじめた

K：49歳：現山手111番館の調査をしているときに、モーガン邸が現存することがわかり、保存運動を行ったことから

L：40歳：育児に行き詰まり、公民館で会に参加し、主婦でも地域で暮らすことでいろいろ生み出すことができるとわかった

M：42歳：相模川の近くに住み、子どもと遊びに行っていた相模川が変貌することに気づき、相模川の調査を始めた。それをきっかけに、相模川でネットワークをつくろうとしていた人たちから声がかかった

N：36歳：公民館の講座に参加し、自分が住んでいるまちが子どもの目線で作られていないことに気づいた

O：38歳：くらべよみの会に参加したこと

P：42歳：工務店を交えての勉強会の中で、住宅のユーザーになる子どもを育てる必要性を感じて

Q：37歳：パネルシアターを行う講座を受けて

R：34歳：仕事でニュージーランドのプレイセンターを知り、理念に共感し日本に紹介しようと思った

S：(不明)：高校時に入院し、勉強を教える保育士になりたいと思ったことがきっかけ

T：(不明)：大学1年の時にテーブルブラリーに参加したのがきっかけ

## (2) 30歳代後半から50歳代にかけて、活動開始

高校生から活動をしていたという人を除き、ほとんどが30歳代後半から50歳にかけて、活動をはじめている。これは、子どもの手が離れる年齢であり、再就職してM字曲線の2つ目の山を描く時期である。それが今回インタビューした人たちは、再就職ではなく市民活動をはじめている。

## (3) きっかけは多様

活動をはじめたきっかけは多様で、「子どもを亡くした」「子どもが障害者」あるいは「外国での経験を生かして」「イベントに誘われて」というような個人の暮らしや経験特有のもの、あるいは仕事がかっけという人もいるが、20名のうち6名は、「公民館の講座」「学習会」などの講座がかっけになっている。

## (4) まとめ

### ① 再就職の代わりに、社会活動

30歳代後半から40歳代にかけて、という子どもの手が離れる時期に活動をはじめた人が20名中15名であった。比較的経済的に恵まれた家庭で専業主婦をしていた人たちが、何らかのかっけで社会活動に向かっている。再就職の時期に社会活動をはじめているのは、経済的には就労の必要がないことも背景にあるだろう。

### ② きっかけは多様

約4分の3の人が、個人の暮らしの体験や経験を活動に結びつけている。また約3分の1の人が、「公民館の講座」や「学習会」がかっけで、社会活動に参加している。かっけを与える講座の役割が大きいことがわかった。そういう意味では、日本女子大学が生涯学習センターをもつ意味は

大きい。参加者がきっかけが得られる講座をどのように企画・運営できるかが、課題であろう。

## 5. 日本女子大学の教育が果たした役割

### (1) 大学の理念「3綱領」に言及した人が9名

活動をする上で「3綱領（信念徹底、自発創生、共同奉仕）の影響があった」と言及した人は、20名中9名であった。「社会活動とは、まさに3つの教えそのものである」という卒業生もいた。

しかしながら、回答した人の年代層が偏っており、年齢層はかなり高い。9名のうち6名は60歳代である。30歳代も二人いるが、そのうち1名は豊明小学校から日本女子大学の一貫教育経験者である。彼女は「小学生の時から3綱領を聞かされた」と回答していたので、長い学園生活の中で身についたと思われる。

ところが、年長者以外は3綱領について触れている人は少ない。「知らない」という人もいた。50歳代以下にはあまり浸透していないし、それが活動の原動力にもなっていないようである。

### (2) 在学中にキーパーソンに出会った人が7名

五味智英先生、上代タノ先生、清水知久先生、吉田八重子先生、松尾均先生、一番ヶ瀬康子先生、正木光先生など、特定の教員名をあげて、影響を受けたという人は7名いる。彼らの多くは、その特定の教員から課外授業として「自主ゼミ」でしごかれている。これは小規模教育のメリットでもあり、こうした課外授業の伝統があったと思われる。

一方、キーパーソンをあげた人の年齢も高く、若い世代からは特定の教員名は挙がっていない。

### (3) 物事を追求する方法を学んだと回答した人が12名

大学で学んだこととして20名中12名があげているのが、ものの捉え方、追求の仕方である。

- ・先生たちから研究者としてのあり方、考え方を学んだ。物事を追求するやり方を教えていただいた（家政理学科1部）
- ・ものを調べる楽しさ、真実を求めることの大切さ、面白さを教えられた（国文学科）
- ・一つの地域を総合的に見る見方を学んだ。そうした研究の方法が、その後のものの見方に応用されている（英文科）
- ・アカデミックな知識のみや、記憶に頼る学習方法でなく、論文を書くことなどを通して、勉強とは自分で疑問を持ち、自分で本や文献を読み、答えを出していくことだと学んだ（家政経済学科）
- ・現実社会を相手に考え、実践せよという学びは大きかった（家政経済学科）
- ・2人組で実験したが、二人なので目的から結果まで自分たちで考えざるを得ず、結果を出すプロセスを学んだ（家政理学科一部）
- ・NOということや、批判的視点など、現実や理論を社会科学として問い直すことを学んだ（家政経済学科）
- ・上代タノ先生の自宅に招かれ、「沖縄出身の学生は、学んだことを沖縄に還元しなさい」と話されたことに大きな影響を受けた（教育学科）
- ・一つのことを掘り下げていく、調べる、膨らませていくというやり方は、大学で教わったと思う（住居学科）
- ・生き方（史学科）

- ・実験に際して、先生方は学生たちに自分たちで考えさせてくれた。物を作り、工夫したことが今に生きている（家政理学科一部）
- ・自分がやりたいと思ったことをやるにはどうすればいいのかということ自分で考え、素材を探し、目的にたどり着くプロセスを学んだ（史学科）

20名中12名が高校時代とは異なる大学における学習方法、つまり自分で考えることや、「ものの考え方、捉え方」ならびに「やりたいことを実現していくプロセス」、「批判して実践する」（時にはチームで）というやり方を学んだと回答している。問題を見つけ、課題化し、解決策を探し、実践する。これは社会活動のプロセスそのものである。学科は異なっても、日本女子大学にはこうしたプロセスを共有化できる教育の土壌があるということである。

#### （5）まとめ

本調査からは、日本女子大学の教育が果たした3つの役割が浮かび上がってきた。

- ① 「自主ゼミ」などを行う魅力的な教員がいたこと（ただし、シニア世代）
- ② 3綱領の影響（ただしシニア世代）
- ③ ものの見方、課題への取組み方など大学教育の基礎を教わったこと

しかしながら、①、②については、主にシニア世代が回答しており、50歳代以下の世代に引き継がれていない。これをどう継承していくかは大きな課題である。

#### ①魅力的な教員

魅力的な教員は、今後社会活動を担う人材育成に非常に重要な要素である。多感な時期に出会う教員は、今後の人生を大きく左右する。若い世代が「魅力的な教員」をあげていないのは、課題である。今後、どう魅力的な教員たりうるか、あるいはリクルートするかは重要であろう。

#### ②今だからこそ3綱領

混迷している現代に、3綱領を改めて見直し、提案する意味は大きい。ただ、以前と同じように掲げても、現代の大学生の胸に届くかは疑問である。社会状況を考えた上で、どう3綱領を表現するかが課題であろう。

#### ③「生き方」を伝えてきた日本女子大学の伝統を、どう次に生かすか

最近では大学でも市民活動のマネジメント講座などが盛んであるが、社会活動の基本はそうしたスキルではなく、問題に敏感に反応し課題を発見し、それにどう取りくんでいくか、ということである。これは人間がどう生きるかということにも繋がり、大学教育の目的でもあろう。今回インタビューした卒業生の多くが「モノの見方を教わった」と回答しているのは、大学教育としては成功していると言っても過言ではない。若い世代も同様に答えているのは、非常に力強い。

この卒業生が受けてきた教育の中身を、3綱領とともにあらためて評価し、継承していくことが最大の課題ではないかと思われる。

## 6. 社会活動において、卒業後の生涯学習が果たした役割

(1) 一旦活動に入ったら、学習し続けている

- ①さまざまな施設を見学したり、日本の障害者の現状、施設運営、障害者に関する法律についてなど学び続けている
- ②どの活動においても、継続的な学習が必要である
- ③日本語教育の専門家による講習会をずっと続けている
- ④自然保護協会の指導員資格を取ったり、ガイド資格を取るなどの学びを続けている
- ⑤ケアマネジャーの資格取得など、学習は常に必要である
- ⑥スリランカの現状を学ぶために現地で学習会をはじめ、その後もスタディーツアーを続けている
- ⑦1級建築士の資格を取ったり、環境共生住宅について学んだ
- ⑧学んだ英会話は海外の施設見学に役立った。通信教育で社会福祉を学びボランティアについて深く考えることができた
- ⑨アナログ録音したテープをデジタル化するソフトの使い方を学んだ
- ⑩活動に応じて学んでいるが最近は社会福祉士の資格を取得した
- ⑪自主保育のための子育てのあり方、組織運営、行政への対応。川の調査方法の研究。NPO法人化の手続きなどその都度必要なこと

11名を例にとったが、ここで見られるように、問題にぶつかり課題を発見したあとは、解決に導くための道筋をたどるために、全員がそれぞれに学習を続けている。社会活動と学習は一体化している。

(2) 生涯学習が果たした役割について

メリアムとカファレラは著書『成人期の学習-理論と実践』（鳳書房、2005）の中で、「社会教育の到達目標とは、生涯を通じて自己決定しうる能力の向上をめざすもの」と定義している。また、関口礼子は学習とは「行動の価値的変容」であるという（関口・小池・西岡・鈴木・堀著『新しい時代の生涯学習』有斐閣アルマ、2005）。今回インタビューした卒業生たちのほとんどは、単なる「学習」ではなく、課題を解決するために学び、それを活動や地域に戻している。これは自己決定能力を向上させるという社会教育の基本の実践であろう。

一度、課題を発見してしまえば、そこからは絶え間ない能力の向上を目指した活動がはじまる。そういう意味では、学習と社会活動は裏表の関係にある。

まずは問題を問題として感じること、そして「どう課題を発見するか」が重要であるが、そのきっかけとしての公民館や学習会などの講座が果たす役割は大きいことも、本調査の中で明らかになった。日本女子大学として卒業生にどのように、どのようなボールを投げる事が出来るかも課題である。

## 7. 今後についての提案

今回の調査で一番大きな収穫としては、インタビューに応じてくれた卒業生の多くが「大学ではモノの見方、考え方を教わった」と回答していたことである。感性を磨き、モノの見方を学ぶことが出来てはじめて、ボールが投げられた時、関口（前述）がいうように、「学習をしなければならないのだ」という心構えと学習する方法を知っているという学習技術があって初めてボールを受け

止めることができる。これまでの日本女子大学では、その教育がかなり成功していたことが調査結果として得られたのは、大きな収穫だろう。

問題は、その伝統をどう受け継ぎ、なおかつボールを投げることができるかということである。今後の提案としては、以下のことが考えられる。

①これまでの伝統を受け継ぎ、感性の豊かな学生を育成する大学教育プログラムを常に創造する

これまでの教育の中身を分析する。「モノの見方を学んだ」という卒業生から、具体的にその学びの内容をヒアリングするとともに、影響を受けたという名前があがった先生方は、具体的に何を学生に残したのかをさらにインタビューする。その上で、魅力的な教員、日本女子大学の大学教育の原点を明らかにする。このプロセスは、3綱領の現代的な表現を探ることでもある。

②①を継続的に実践するために、大学教育をサポートし、在校生や卒業生にボールを投げる役割を果たすものとして、生涯学習センターやたとえば社会参加・社会貢献センターを構築する。

大学側は卒業生の社会活動の動向をあまり把握していないので、どのようなセンターにしる、情報を収集するセンター機能は必要である。また、在校生や卒業生を対象に、自分の課題を発見するきっかけをつかめる講座を実施することも重要である。日本女子大学の卒業生には社会起業家、中小企業の社長などが多い。NPO・NGOのみならず、コミュニティビジネス、社会起業なども視野に入れたセンターにしたほうが、広がりが持てるであろう。

日本女子大学がセンターを持つ際の機能等については、多くの卒業生が雄弁に語っている。そうした思いを生かし、具体的に機能する社会参加・社会貢献センターをつくるために、ぜひとも卒業生などの協力を仰ぎ、企画段階から参加していただくプロセスをとる必要がある。その上で、センターの運営にも卒業生の協力をあおぐことができれば、さらにセンターの機能は発揮される。

注

- 1) 23回生。日本女子大学家政学部家政経済学科教授、「特定非営利活動法人さいたまNPOセンター」副代表理事。
- 2) 24回生。日本女子大学家政理学科一部卒業後、日本女子大学助手を経て、3人の子どもを地域の自主保育で育て、価値観の違う地域の人々と知り合う。農業空中散布反対や「原子力燃料追っかけ」を市民との連携で行い、「まちづくり情報センターかながわ（通称アリスセンター）」事務局に参加して、「NPO法人相模川倶楽部」などを立ちあげる。現在、日本女子大学学園活動評価・戦略室非常勤職員。
- 3) 29回生。日本女子大学家政経済学科卒業後、保険会社勤務を経て生活クラブ生活協同組合の関連会社に勤務。そこで市民活動家らと知り合い、1988年に「まちづくり情報センターかながわ（通称アリスセンター）」の設立とともに事務局長に就任。「NPO法人よこはま里山研究所」を経て、現在、「横浜市市民活動支援センター」非常勤職員。2007年度日本女子大学キャリア形成科目「NPOとNGO」非常勤講師。

謝辞

本調査に当たり、卒業生を紹介していただいた各学科、快くインタビューに応じてくださった卒業生、また、インタビュー調査に参加していただいた卒業生には大変お世話になりありがとうございました。感謝申し上げます。また、とりわけ、まとめの作業に中心的に加わってくださった川嶋さん、土屋さんには共同執筆者となっただきありがとうございました（堀越）。

## 【編集後記】

『日本女子大学総合研究所紀要』第10号をお届け致します。本号は、2006年度に研究期間を終了した研究課題の研究成果を掲載しております。今号該当は、研究課題（27）「学際的共同研究による生活安全保障科学の創成」、研究課題（28）「女子大学における生涯学習の意義」、研究課題（30）「教育現場における精神的な困難を抱えた子どもたちと家族への支援のあり方に関する総合的研究」の3課題で、充実した号となりました。各プロジェクトにご参画くださいました研究員・客員研究員のご研鑽ならびに関係各位のご尽力に感謝いたします。

当研究所が公募する研究課題の研究範囲は、下記の通りです。

- (1) 創立者成瀬仁蔵に関する研究
- (2) 日本女子大学一貫教育に関する研究
- (3) 日本女子大学を拠点とする学際的な共同研究・調査

(1)(2)は、本学固有の課題を、(3)は一般性・普遍性のある課題を対象としますが、本年度の研究課題はすべて(3)に該当することになります。本学固有の課題の重要性は言うまでもありませんが、広い視野に立つ研究の拠点となりうる課題の活性化もまことに喜ばしい限りです。

学内外の皆様のご意見・ご叱正をいただければ幸甚です。また、ご支援・ご鞭撻も賜りますよう、お願い申し上げます。

(今号編集担当 倉田宏子・橋本のぞみ・鄭銀志)

## 日本女子大学総合研究所紀要 第10号

---

2007(平成19)年11月1日 発行

発行人 倉田宏子

発行所 日本女子大学総合研究所

〒112-8681 東京都文京区目白台2丁目8番1号

電話 03(3943)3131(代表)

03(5981)3277(直通・FAX)

印刷所 メディア・パックス

〒178-0061 東京都練馬区大泉学園町6丁目13番20号

電話 03(5947)9135

---